COM vol.20 CONTENTS

COM TALK	中島史恵	2
Front Line 建築家インタビュー	栗生　明	3
Arrangement 納入事例	日本橋弥生ビルディング	8
	石井記念愛染園付属愛染橋病院	10
Renewal リニューアル事例	郡山中町ビル	12
New Lineup 新製品	ターンテーブル内蔵型「地下旋回」タイプ	14
Barrier Free バリアフリー	機械式駐車設備のバリアフリー化	15
Information COMプレゼント		16

COM TALK 中島史恵

運転免許をとったのは、十九歳の時でした。故郷の長野では運転していたのですが、上京してからは怖くて走れませんでした。ハンドルを握るようになったのは、三年ほど前から。知人が「ベンツなら相手が避けてくれるし、ぶつかってもケガも少ないから」と言って、SLKを安く譲ってくれてからのことです。その車にずーっと乗っていますが、まだ一度も故障したことがない〝頼もしいヤツ〟です。

車の良いところはラジオが聴けることかな。ふだん家にいても、ラジオを聴くことがないので、運転中はカーステレオではなくて、もっぱらラジオをつけています。最近、ラジオショッピングが充実していて、家に着いてもまだラジオショッピングを聞きながらメモをとっていることがあります。

二〇〇二年四月の「ロシアンラリー」に出場したんです。あまり知られていないラリーですが、ロシアのナホトカからシュトコボまでの一五〇〇キロの行程を五日間かけて走るというもの。私はプロのドライバーと組んで参加しましたが、お母さんと息子とか修理工場の親父さん同士などというコンビで、順位を競うというより、むしろ走るのを楽しむというラリーでした。ぬかるみにはまった車をみんなで助け起こしたり・・・そんな長閑な光景がアチコチで見られました。

駐車でいちばん困るのは車と車の間が微妙な間隔のところ。狭いなら入らないけど〝入れて入れられないことはない〟という場所はやっぱりいくでしょ。でも私は、そういう時は必ず通りがかりの人に「すいませ～ん」って頼んで、誘導してもらうことにしています。

駐車場がなかなか見つからなかったり、あっても満車だったりするとその日一日、気分が悪いですね。反対に駐車場で空きスペースを探している時、一台出たりしたら、その日一日ラッキーな気分になれますね。

要望としては、大きな車も入れられる機械式駐車場を造って欲しいですね。一緒に仕事をするスタイリストやヘアメイクさんは、荷物が多いのでワンボックスカーで移動することがよくあります。彼女たちだけ駐車できないことがよくあるから。

Fumie NAKAJIMA

■プロフィール　女優

1994年、第一回「シェイプUPガールズ」オーディションでグランプリ受賞。芸能界デビュー後は、持ち前の明るさが受けて司会やリポーターとしてのタレント活動のほかに、ドラマ、映画、舞台など活躍の幅は広い。2003年には映画「昭和博徒伝」で最優秀主演女優賞を受賞。

建築は大地につながり、歴史と接続してこそ人が集い、人が憩う一個のランドスケープとなる。

栗生　明

Akira KURYU

そこに行けば、何かが起こりそうだ。
そこにいるだけでわくわくする。
建築と一体化した環境そのものが訪れる人を魅了する、
そんなエリアをまるごとプロデュース。

植村直己が見た風景を、見て体感できる冒険館に

近代建築は、土地から建物を切り離して、世界中どこでも同じものが建てられる、という理念を持っていた。しかし、建築はその土地に根ざした風土と密接にかかわりを持って建てられるべきである。古来、そういう形であった。敷地と新しく建てられる建物を、どのように接続すべきか。それが建築の大きなテーマである。建築を作る時に、その土地を見に行き、その形状、気候風土、さらに歴史を調べることが重要だ。それらと切り離して建築を作ることは考えにくい。その土地の在り様を環境の記憶として大切にしながら、そこに新しい空間と時間をどのようにつなげていくのか。私自身はこのことを考えながら設計をしてきた。

「植村直己冒険館」を設計した時は、植村さんの生まれ育ったところ（兵庫県日高町）が建設地であった。もちろん、展示物には、植村さんが冒険した時の装備やエベレストを含む山々の頂の石などがある。同時に、植村さんが小さい頃に見た風景も一つの展示であろうと私は考えた。訪れた人たちに、当然植村さんが見たに違いない風景をきちんと見せたい。そこで、日高の山並みを隠さないように、地上には大きなボリュームは出さなかった。棚田や雑木林を縫うクレバスを模した細長い通路を作り、展示室は地下に設けた。日中は光が地下に降り注ぎ、夜には地下の照明から光が地上に上がってくる。

植村さんの冒険の方法は、近代装備で自然を征服するのではなく、その環境に身を置いて、体を慣らしていくというもの。準備期間に一年もかけ、エスキモーの村に滞在して、彼らと同じ生活をする。やがて厳寒に生きる知恵を体得して、「日本のエスキモー人」と親しまれるまでになった。植村さんの、そういった冒険の方法そのものを建築の方法に置き換えようと試みた。

環境と断絶していない、環境と接続した建築とは

私はこれまで、いろいろな方とコラボレーションを行ってきた。その中でも、ランドスケープデザイナーの宮城俊作さんとの仕事は重要なものだ。特に場所選びにおいて、敷地の中のどこに建物を作るかを考える時、既存の風景や景観をどう評価するのか。土地の潜在力を見つけ出し、それを建築によって顕在化する。仕事を頼まれた段階で、宮城さんとその敷地を見に行き、歩きまわる。太陽の光はどの方角から来るのか。地面の起伏はどんな状態なのか。設計の打ち合わせなどの機会を利用して、時間を変え、季節を変えてその土地に足を運び、調査を重ねる。

一般には、宅地開発を例にとるまでもなく、建設用地にブルドーザーを入れて、平らに整地することが多い。しかし私は、どんな地形であってもその地形を生かして建築は可能だと考えている。その地形の面白さや、その土地の持っている記憶を引き出して、それを顕在化することが建築家の役割であり、ランドスケープデザイナーの役割なのではないか。

植村直己冒険館　外観

あたかも落下傘のように、突然よそから建築を持ってきて、その土地に置くのではなくて、茸が生えるように、その土地に馴染んだ建物ができないだろうか。環境を断絶して建物を作るのではなく、環境と接続しながら建築が設計できないだろうか。時間的にも空間的にも接続していること。それが、「植村直己冒険館」を設計した時に私が最も考えたことであり、それ以降、今もずっと考え続けている。

植村直己冒険館

商業建築と公共建築。条件の壁を破る秘策とは

建築は、特に商業建築においては、オーナーから与えられた条件に、建築家が答えを出していく作業である。大きくは、敷地、用途、予算の三つの条件がある。私が学んだことは、あらゆる条件は変え得るということである。この用途に対して、この敷地では良くないと説得できれば、その土地を売って、適した土地に買い換えることができる。用途も、別のものの方が良い場合がある。オーナーと一緒になって、一番良い方法を探していく。予算も、予測以上に収益が見込めるとなれば、銀行がもっと貸してくれる。あるいは、そんなに予算をかけなくても効果があがるから、と予算を削ることもある。考えようによっては、これは、オーナーとのコラボレーションである。同じように、公共建築のプロジェクトであっても、敷地を変える、あるいはプログラムそのものの変更も提案できる。

岡崎市美術博物館の設計では、当初の依頼は収蔵庫のデザインだった。徳川家ゆかりの品をはじめ、市内に分散する文化財をきちんと管理し、預かるための収蔵庫の建設が急がれていた。

しかし、自然環境の良いところに、ただ閉じた箱を置いても良くないので、敷地をずらして、斜面に埋めましょう（敷地の変更）。収蔵庫の余裕をもたせたスペースを利用して、企画展示をしてみてはいかがか。こうした提案が実り、オープン時には収蔵庫ではなく、美術博物館として開館。いずれ本館を作る計画まで進んでいる（用途の変更）。

岡崎市美術博物館　外観

隣接するスポーツ施設の利用者のために、公園施設としてレストランも提案。美しい夕陽や、夏は夕涼みがてら花火を眺めに来る市民でにぎわっている。建物の中は美術博物館になっているが、ここはひとつの環境ミュージアムといえる。環境そのものでいろいろなイベントができる。それもひとつの芸術活動だと私は主張した。

岡崎市美術博物館

宇治平等院鳳翔館。ひと筆書きで巡る愉悦

ミュージアム建築では、動線を重視する。どこから入って、どこから出ていくのか。その途中で、どのようなドラマを建築として演出するのか。のべつ幕なし展示物を見せるのではなく、ところどころで外部環境に接することができるような仕掛けをする。地下だけれども、空が見えたり、上から光が落ちてくる。そういうスペースを織り込みながら、動線を組み立てる。

宇治平等院鳳翔館では、来館者の動線を誘導して、ひと筆書きで巡るように設計した。地下の展示室で宝物を観て、地上の平屋に出てくる。広い縁側のようなコーナーを作り、天高を千八百五十ミリにして、座りたくなるように仕向けた。座敷に座って庭を眺める目線で、借景の山々や鳳凰堂の屋根を望むことができる。水屋を併設し、お茶会ができるようにもなっている。出口の手前には、ひと休みできるように、ミュージアムショップを置いた。

平等院には九百五十年という歴史があり、設計に際して各方面の行政や景観条例から和風建築で、との要請があった。鉄骨やコンクリートで、木造を思わせるような表現を取り込んだり、ガラスに和紙をサンドイッチして、障子のように見えるように工夫した。現代的な技術と材料で、和風表現を試みた。日本建築様式をそのまま持ってくるのではなく、新しい空間、新しい表現を対峙させながら、調和させることがテーマだ。

外部から建築をどう見せるのか。どこを見せないのか。人間が中に入った時に、外がどのように切り取られて見えるのか。光の取り込み方によって、開口部のデザインが変わってくる。そして建築は、その中にいる人間そのものも、知的に見せたり、美しく見せる役割をも担っているのである。

宇治平等院鳳翔館　外観

宇治平等院鳳翔館

バイオ・パーキングタワーという夢

昨年開催された「愛・地球博」で、私はバイオラングと名づけた緑化壁をデザインしたのだが、これをパーキングタワーに組み込むことを提案したい。バイオラングとは、「生命の肺」を意味し、壁面や屋上を植物で緑化する試みである。

これは、駐車設備において、植物で車を隠すという発想だ。気温も下がるし、空気浄化作用も期待でき、イメージアップにつながる。パークタワーがひとつの環境として貢献できるような存在にするために、バイオラングが使えるのではないか。「愛・地球博」の会場では、三、四度気温が下がり、ミストシャワーも併設して、来場者からは大変に好評だった。

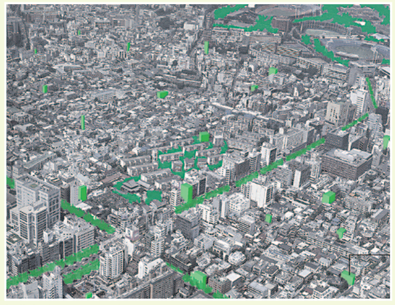
東京都には条例があり、建物を建てる際に必ず緑地を作らなければならない。それができなければ屋上緑化や壁面緑化が義務づけられている。限られた敷地面積の有効利用という観点からも、壁面緑化は有用だ。

今、自動車もエコカーの開発が注目を集めている。環境や健康について語ることが、時代の大きな流れの中心にある。車がエコカーとして進歩する時代に、車を入れる入れ物の進化がバイオタワーとして可能となる。

緑化壁の技術は日進月歩であり、自動灌水や施肥も研究されている。最先端技術を集めた車とバイオウォールの組み合わせで斬新なイメージが作り出せるのではないか。

私がデザインの監修を手がけた神戸空港では、屋上を緑化し、ロハスエアターミナルと銘打っている。壁面に広告を仕込むことによって、建設費や維持費を賄うアイディアもある。

「愛・地球博」バイオラングからイメージしたバイオパークタワー


緑化都市のイメージ

P R O F I L E

栗生　明（Kuryu AKIRA）
1947年千葉県生まれ　早稲田大学大学院修士課程修了
槇総合計画事務所、都市建築設計事務所を経て、
1979年Kアトリエ（現・栗生総合計画事務所）設立。
千葉大学教授

主な受賞暦
「植村直己冒険館」で1996年日本建築学会賞ならびに1998年ケネス・Fブラウン・アジア太平洋建築デザイン賞を受賞。
「平等院宝物館・鳳翔館」では2001年グッドデザイン賞と2002年建築学会作品選奨、さらに2003年日本芸術院賞を受賞。
「国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館」で2003年長崎市都市景観賞、日本照明賞、アルカシア賞などを受賞。

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館